独立行政法人 国立病院機構
四国こどもとおとなの医療センター

アートプロジェクト

―今月のショット―

2015年　4月号

―院内の小さな声から―

家族の誰かが、ある日、病や怪我に倒れ、突然「患者さん」になります。昨日までは元気に生き生きと生活していたのに…その時痛みを感じるのは患者さん本人だけではありません。ご家族も同じように、心に深い痛みを感じます。患者さんの身体の「痛み」は医療スタッフが全力で取り除こうと努力します。でも、患者さんやそのご家族の心は。

数年前、親戚の赤ちゃんの手術に付き添った事がありました。不安いっぱいのお母さんにかける言葉が見つからないまま待合室に入ると、同じく待合室で待っている新米お父さんが二人、「赤ちゃんがんばれ。お母さんも頑張れ」と笑顔で声をかけてくれました。あの時、その一言に、私たちはどんなに励まされた事か。同じ痛みを背負ったものだからできるサポートがあることを知りました。そして、それはたった一言、ほんの一瞬の笑顔で充分なのです。医師のまなざし、看護師の一言が、患者さんの家族の痛みを和らげます。それは気休めでもなければ思い込みでもありません。見えない心は見えない心によって確かに治療されるのです。

Hさんの絵手紙作品展

Hさんが意識をなくしてから、ご主人はほとんど毎日病院に通っています。

地域のため様々な活動の役員を引き受け、率先してボランティア活動をされているご主人です。Apple Watch や iPhone を使いこなし、愛犬のミミちゃんをまるで我が子のようにかわいがり、いつお会いしてもすっきりとした身だしなみで、どこにも悲壮感は漂っていません。

Hさんの耳元に小さな iPod を置いて「この曲をかけるとな。目を開けるんや」と嬉しそうに話されます。Hさんがうっすらと目を開けるその曲は合唱曲のようでした。「これは息子の奥さんがくれたんや。」と見せてくださったのはシロクマのぬいぐるみでした。Hさんの手首を抱くようにシロクマのぬいぐるみが配置され、白いシーツの上でくつろいでいます。病室の中はいつも清潔で、Hさんを想うまなざしがすみずみまで届いていることを感じさせます。

ご主人は昨年、Hさんとご自分が描いた絵手紙を一冊の本にまとめられました。「生きられたら生きられたで良い」と考えるご主人とは違って、「生きてきた証が欲しい」という思いの強いHさんは、何事にも積極的で仕事に趣味に全力で向き合っておられたそうです。本の1ページ目にご主人によって書かれた短い文章があり、「生きてきた証」という題名がついています。（成人外来の本棚に御寄贈いただきましたのでご高覧下さい）

現在病院の1階ギャラリーでお二人の絵手紙作品展を開催しています。2ヶ月に一度、ご主人と一緒に、数百枚ある絵手紙の中から7枚の作品を選んで展示しています。作品を手に取りながら、Hさんのことを話します。「料理が好きで、お客が来たら懐石料理を出したりするんや。」「とにかく前向きでな。いつも何かして動いとる。」「もともと気が強いやろ。喧嘩になったらこっちがやられるんや」ひとしきり笑った後、目尻をつたって頬を流れる涙は、ご主人が今、心の中でHさんと出会われたことを物語っていました。

時々、まるで今Hさんがそこにいてご主人を励ましているとしか思えないような作品が出てきます。その日、ご主人が選んだ作品の中に、曲がったシシトウが描かれたものがあり、「ここまで頑張るなら私もつきあうよ」と言葉が添えられていました。私はご主人の描いた絵手紙のなかに「迎えが来たら追い返せ」という言葉を見つけました。お二人とも、今、この時も、前向きに生きようとしていらっしゃるのだと感じました。会話はなくてもそこに長年一緒に生活してきたお二人の、力強く確実な、呼応し合う呼吸のようなものを感じました。

今月の一枚

作家：三浦　賢治　「過日」

特定の某所といった風景ではない、懐かしさを感じさせる場所を描きました。また、一見関連性のないアラベスク風の模様を画面に取り込み、観る側のイメージを膨らませるコラージュ的効果を意図しました。